アイヌ文化を守り抜く

萱野　茂

「イランカラプテ」

北海道の空の玄関、新千歳空港に掲げられているこの言葉は、アイヌ語で「こんにちは」を表し、北海道を訪れる多くの人々を歓迎しています。

〔萱野志朗氏　蔵〕

かつて、アイヌ文化の継承、保存のために生涯を尽くした萱野茂が、この景色を見たとしたら、何を思うでしょうか。

〔新千歳空港構内〕

茂は、一九二六年、北海道平取村（現在の平取町）二風谷で、古くから北海道に先住していたアイヌ民族の家の子として誕生しました。家は村一番の貧乏でしたが、アイヌの伝統を重んじる家族にかこまれ、茂は心健やかに育ちました。

北海道に和人が移り住むようになり、長い年月が経過していたこのころは、アイヌの人たちの生活の中にも、和人の文化が入り込み、アイヌ語よりも日本語を話すアイヌの人たちが多くなり、昔ながらの暮らしや伝統、文化が次々と忘れ去られつつありました。

茂の家では、アイヌの伝統を重んじる茂の祖母が、「お前は、アイヌ語を絶対に忘れないでおくれよ。」と、茂にアイヌ語やアイヌの歴史について、いつも教えてくれていました。しかし、このころの茂は、「アイヌ文化が何だ。アイヌ語が何の役に立つものか。」と考えていました。

茂が十八歳の時、祖母が亡くなると、いつしか、日々の生活を保つことで精一杯だった茂の家からアイヌ語は消えていってしまいました。

一九五三年、茂が二十七歳のある日、家に戻ると、父が最も大切にしていた*トゥキパスイがなくなっていることに気がつきました。生活に困った父が、アイヌ民族の研究をする学者に売り払ってしまったのです。

当時は、学者たちが、北海道の歴史を研究するためという理由で、アイヌの人たちの住む地域や家から、伝統的な民具などを譲り受けたり、買い取ったりしていました。

茂の家でも、茂の周りから、アイヌ語だけでなく、アイヌの伝統や文化そのものがなくなろうとしていました。

そのとき、茂は初めて、「これでいいのか。これでは、私が育った町、私を育ててくれた家族が大切にしてきたアイヌ文化はどうなるのだ。ようし、それなら俺がそれを取り返してみせる。」と、自分の力でアイヌ文化を守り抜く決意をしました。

茂は、貧しくても初心を貫こうと、苦労して得たお金を惜しみなく使い、伝統的な民具がただ同然で持って行かれるのを防ぐために自ら買い取ったり、*テープレコーダーを片手に、*ユーカラを歌えるアイヌの老人を訪ねて録音して歩いたりしました。また、茂は、アイヌの伝統的な木彫りを熱心に練習し、いつしか生計を立てるまでに上達しました。

「今、アイヌ文化をきちんと残さなければ将来消えてしまう。これはお金にかえられない、私たちの財産なんだ。」と、懸命にアイヌ文化の継承、保存のために駆け回りました。二十年間で集めた民具は二百種一千点以上にも達し、やがて多くの人々の寄付金によって、一九七二年、ついに二風谷アイヌ文化資料館を開設することができました。

二〇〇六年五月、アイヌ文化の継承、保存に大きく貢献した茂は、七十九歳でこの世を去りましたが、現在も、茂の情熱は受け継がれ、各地で、アイヌ文化の継承や保存の取組が盛んに行われています。

一九二六	平取村（現在の平取町）二風谷で生まれる。
一九三九	造林人夫として働き始め、以降、測量人夫、炭焼きなど仕事を転々とする（十二歳～）
一九五一	同じ村に住むれい子と結婚する（二十四歳）
一九五三	民具、民話の収集、記録を始める（二十六歳）
一九七二	二風谷アイヌ文化資料館を開設する（四十六歳）
一九七五	平取町議会議員に初当選する（四十八歳）
一九七八	北海道文化奨励賞を受賞する（六十七歳）
一九九三	北海道文化賞を受賞する（六十七歳）
一九九四	アイヌ民族初の国会議員となる（六十八歳）
二〇〇六	札幌で死去する（七十九歳）

*トウキパスイ…長さ約三十センチメートルの木のへら。お祈りをするときに必要な道具

*テープレコーダー…音声などを記録、再生する装置

*ユーカラ…アイヌ語で語られる英雄や神々の物語など